

私の腎臓移植体験記

平成5年11月記す

臓器移植論議をみてみますと、早急に脳死を認めすぐにでも臓器移植を行うべきだという推進移植医と、脳死は「人の死ではない」と訴え、脳死状態から腎移植を行った移植医を告発するという医師グループが両極端な論争を繰り広げていました。考え方に極端な開きのある中で臓器の提供を受けたいと願うレシピエントやその家族を中心に日本も一刻も早く臓器移植に踏み切るべきだという人たちと、脳死者からの臓器移植は社会的弱者の切り捨てになると主張する論者との間にもやはりかなりの溝を感じます。前に読んだ本の中に宗教者や哲学者などからも、日本には特殊な文化的背景があり生死観は欧米諸国とは異なるのだから脳死は認められない。逆にこれは「布施」にあたる人類愛であるという意見もあるようです。

しかし一般市民を対象にしたアンケートでは、脳死を「人の死」と認めて、臓器移植を行うべきである、というコンセンサスはできあがりつつあるように思います。けれどもどのようなアンケートを見ても、まだ2割過3割の人たちは、この医療技術をどう受けとめるべきか、はっきりと回答できないでいるように思えます。正直なところ、自分がそういう場に関わりを持たなければ、明確な意思表示はできないと思っているためでしょう。

私も移植に直面するまでは、まるっきり反対ではないにせよどちらかというところ否定的な考え方をしていました。腎不全を宣告されてから、今日に至るまでの体験記をこれからお話ししたいと思います。なにせ私も弁士でも作家でもありませんので思いがどこまで伝わるか不安ではありますが、どうぞ最後までお付き合い下さい。お暇な方はおつきあください。

腎炎にいたるまで

小学、中学と通して体操をやっていたりしてこれといって大した病気もせずに高校まで来ました。それまでは殆ど病気とは縁がなく、記憶にある病気といったら風邪くらいでした。高校に上がってから私は今まで続けてきた体操競技をやめました。別に大した理由があった訳でもなくただ単に体操部が無かっただけの事です。そこで私は唄が好きでしたので、フォークソング同好会をつくり、仲間と毎日楽しくやっていたりしました。

高校2年の夏休み前に学校の尿検査で蛋白が出ているというので、学校の再検査を受けました。その時は2+でした。蛋白が常時出ていること自体良くないので、夏休みを利用して秋田市の中通病院で検査を受けるようにと言われ入院しました。

そこで腎臓に関する検査、腎生検や総合的な検査を受けましたが結果は急性糸球体腎炎。それから1カ月間ステロイド投与を受けて安静が続きました。良くないことに、自分としてはそんなに重大な事とは思っても見ませんでしたから、初めての入院で興味津々、楽しくて仕方ありませんでした。

病院に入ってまず驚いた事はとにかく老人が多い。若い人は誰もいない、いちばん近い人で確か39才の方だったと思います。今から12年も前の話です。現在では高齢化率も更に拍車をかけていることと思います。私が入ったのは循環器病棟でしたのでほとんどが心臓の病気の方で高齢の方が多かった。大きな楽しみといえば、看護学校の生徒さんが2名私に勉強の為にでついていましたから、暇になると病棟の学生さんがみんな集まってきて楽しく過ごしました。入院の意味をはき違えている典型的な脳天気患者でした。私の入っている病室にいた方々も付き添いさんはじめすごく乗りが良かったせいもあり楽しく過ごしました。

さて、退院予定日が近づいてきまして主治医と面談し、今までの経過を聞きました。なぜそうなったかは良く解りませんでした。最終的に告げられたのが「慢性糸球体腎炎」でした。その時主治医がいうには、「あなたに腎臓は今正常を10とすると8前後しか働いていません。この数字自体は別に今すぐにどうこうという物では無いけれども、将来悪化した場合透析が必要になります。わかりやすくいうと、今一般の年齢で40歳程度（私は17歳）の働きをしていると思って下さい。ですからその年齢に達するまで大事にしていれば後は自然に機能低下するものですから普通の人と変わらなくなります。腎機能が低下しないように1カ月に2度通院して、薬を飲んでいけばいいとの事でした。

この病気は別に痛くも痒くもない。なにせ本人は病気だという自覚がない。薬は3分の1も飲まない。これで良いわけもなく、夜は遅くまでレストランの厨房でアルバイト、朝は6時に起きて学校という生活、健康な人間でも参ってしまうような生活。節制も心がけるどころか体力に自信もあり精力的に何でもこなしていました。

腎不全に至るまで

高校も3年になりクラブ活動も最後になり、フォークソング同好会としても文化祭に向けて力が入っていました。入りすぎるくらいのめり込んでいましたから、文化祭前日などは、リハーサルや機材のセッティングで学校に泊まり込み夜中の2時

くらいまで動いてました。それがいけなかったのでしょうか。2時間のコンサートが終わってすぐ喉の痛みを感じ、しばらくすると自分一人では歩けない状態になって病院に運ばれすぐに入院する事になりました。

その時、主治医にいわれたのは通常の半分以下という事でした。また腎生検とステロイド投与を受け、絶対安静を言い渡され1カ月間ベッド上安静で寝ていました。いままで感じなかった疲労も慢性的に感じるようになり、今思うと殆ど自殺に近いものがあります。知識がないという事は本当に恐ろしい事だと思っていました。

退院後はもう2週間に1回通院して薬をもらって飲むという生活を続けました。体は疲れるし何ととっても気力自体がなくなっていく。気持ちの張りがなくなるんです。学校へも行くのが面倒になり、雨が降っては休み、嫌いな授業があると「通院」といってはさぼって家でごろごろしている日が続きました。

11月になって担任に呼ばれ、「出席日数が足りない」このままでは留年しなければならない事を告げられました。私はかなりいい加減な人間でしたが、高校位出ていないと後々困るという事位解ります。と言ってもこれからもう1年留年までして卒業したいとも思いませんでしたから、担任と相談して補習授業で不足日数分を補う事に決めました。これからが大変です。

もう11月を過ぎてますから雨でも降ろうものならいつ雪に変わるか解らない。それまでしばらくチャランポランな生活をしていましたから学校へ毎日行く事自体も辛い。そのうえ通常の授業を受けた後に2時間の補習授業がある。冬休みいっぱい学校へ通い、さらに春休みも3月31日まで通いようやく4月1日に卒業証書を頂きました。

本当にこの期間様々な方に多大な迷惑をかけました。学校の先生方には休み返上でお付き合いさせ、それでも最後まであきらめずに面倒を見て頂き大変感謝しています。一人だけの卒業式にも、秋田に残ったクラスメイトがみんなで学校に来てくれてお祝いしてくれました。この時自分一人で生きているのでは無いのだなと実感させられました。

卒業後は経理専門学校へ会計簿記の習得のために入学し、同時にとある人にライブハウスを任せ、夜はそこで唄い、夕方は塾の講師をしておりました。ちゃらんぽらんに生活していても、中学校までの勉強ならよくわかります。

22才になり（昭和60年）両親に頼まれ実家の家業である時計店に入り能代支店に赴任しました。一人暮らしを始めるようになってから、少しずつ生活のリズムが違って来たように思います。勿論気をつけてはいましたし、減塩、低タンパク食も基準よりは随分甘かったにしてもある程度守っていました。ただ仕事の性格上たまには酒も飲みましたし、また嫌いでもなかったもので、ついつい飲み過ぎる事もありました。そうこうしている内にクレアチニンは変わらないのですが、尿酸値と血

圧が上昇しました。尿酸値は 8.5 から 9.5 位で、血圧は 140/100 という状態が慢性的に続きました。ザイロリックや利尿剤の投与を受けましたがいっこうに好転の兆しもなく 1 年に何回か痛風にも悩まされました。肉類をあまり食べないようにとよくいわれ気をつけてはいましたがなにせ一人暮らしの身の上ですので外食が多い。なかなか身体に合わせた食事を食べさせてくれるところなど無かった。それでも小さな食堂のお世話になって気を使った特別メニューでつないでいました。

4 年が経過し令和元年の 8 月頃いつものように病院に定期検診にいくと主治医に「疲れませんか？」と聞かれました。そう言われてみると朝は全然起きられないし、何となく慢性的な疲れがたまっている。視力も随分落ちてきて 1.2 だったのが 0.6 になっていました。忙しさに紛れて自分の体の状態に慣れてしまっていたのです。この頃にはクレアチニンはすでに 5 から 5.5 に上がっていました。この時も大事を取って入院しましたが、どうなるものでもなくとにかく体を動かすと筋肉の老廃物のクレアチニン濃度は上がるのだから、「とにかく安静にしている事」という指示をされそのとおりにしていました。この頃から BUN も 40 位に上がり、タンパク質の制限もかなり厳しくなりました。ただあまり取らないと体の脂肪が分解され尿素窒素が上がるという事で食事のメニューも決められるようになりかなり苦痛が増してきました。もうこれで一生うまいものは食べられないのかと真剣に考えたものです。

あの味気ないおかず、塩分制限の為醤油は殆ど駄目。エネルギー補給はもっぱらよく水に浸してカリウムを抜いた野菜炒め。味噌汁は殆どぬるま湯状態、今から思えば良くもこんな物ばかり食べていたと思います。思いは一つです。一日でもいいから透析開始を伸ばしたい、それだけでした。この時食事に気をつけてさえいけば 1 年位は大丈夫といわれ、透析用のシャントも造らずに生活していました。その間、人にすすめられて腸内細菌なる食品を愛用していました。内容は簡単にいうと体にたまった老廃物を各々の臓器に頼らなくても腸の中の細菌が分解して排出してくれるといったものでした。確かにしばらくはクレアチニンも上がらずそのほかの数値も安定していました。しかし高い。月に 10 万円前後かかるのです。それでも藁にもすがら思いで 2 年 3 カ月飲み続けました。そんな努力もむなしく令和 3 年 1 1 月にはクレアチニンもすでに 7.5 を超えもはやこれまでかと再度入院しました。

透析まで

この時に入院したときに主治医はとても親身になって下さいました。色々な本を持ってきて下さって、透析について様々な角度からお話下さいました。また自分でも色々な本を読みあさり勉強しました。そこで日本の移植医療の実態や、脳死の問題などを初めて自分なりに考えるようになりました。腎不全からの治療にしても、血液透析、腹膜還流透析、そして腎臓移植の 3 つの選択肢がある事。透析はあくま

でも対症療法であって、根治治療にはなり得ない。機械は人間の臓器の10分の1を補うのがやっとですから、必ず他の障害が出てきます。

そのころの私は自分で何でも決めていましたから別に両親にも兄弟にもこれといって相談する事はまずありませんでした。勿論そのころ家族は皆事情は知っていたし、私がいなくて随分話し合いや心配はしていたでしょう。

そんなある時下の弟二人が自分の腎臓を提供したいと私に申し出ました。

困惑しました。気持ちは嬉しい。しかしたとえ兄弟といえども今は自立して生活している一人です。仕事も生活もそれぞれが体一つで実家から離れて神奈川で頑張っているのです。そんな彼らをどうして傷つける事ができましようか。医師からいわせればドナーは絶対安全であり手術後も10日もすれば退院して通常の生活ができるという。どこに絶対などという確証があるのか。どんな些細な手術だって院内感染を起こして命を落とす事があるというのですから。

わたしたち兄弟は自分でいうのも何ですが、非常に仲がいいのです。苦しんでいる自分のために申し出てくれた気持ちは解る。自分が逆の立場でもきっと同じ事をしていたと思いますが、だからこそ簡単に受け入れられないのです。それだけ自分の事以上に弟たちがかわいいのです。

私ははじめから、透析していても生活は不自由になるけれど、すぐに生命がどうということもないので、透析を続ける事に決めていました。愛する家族、健康な人間の体を切つてまで自由が欲しいとは思わなかったからです。

しかし自分のどこかでもしかしたら自由になれる！という悪魔のささやきのようなものが頭の中で増殖していく。そんな自分が嫌でたまらなくなったりもしていました。嫌なものです。今の生活で満足出来るのにその上が見えた瞬間に欲が出てくる。手が届きそうになるとつかみたくなる。それがすぐそばにあると尚更です。透析をしても別にすぐに命がどうこうなるものでもない。欲が自分の心を壊していきます。

それから半年が過ぎ5月になりました。いよいよクレアチニンも8.0を超えて1級身体障害者となり、主治医とこれからの事を相談しました。透析はいますぐ必要です。移植をするのか透析療法を取るのか自分で決めて下さい、とのこと。透析療法であればここ秋田でもできますが、腎移植となればやはりしっかりした医療体勢のもとでなければいけません。その頃、秋田大学では移植医療はまだ行われていなかった。もし希望の病院があれば紹介状を書きますとのこと。主治医のすすめと弟たちからの説得で、選択肢はあった方がいいということになり、埼玉の防衛医科大学校病院の中村教授の元へ行くことになりました。母方の従兄弟が防衛医大の移植医であったことが理由です。勿論この時もまだ軽い気持ちでして、どうせ検査を受けるだけ、別に移植すると決まった訳でもない。弟2人と冗談で「頂戴ね」「大事に

使ってね」などと言いついていたものでした。しかしながら、やはり健康な体を傷つけることには抵抗があり、移植するという事は念頭にはありませんでした。

防衛医大に入院するとよくもまあここまで我慢していましたね、と言われそのまま入院させられました。この時のクレアチニン濃度は 11.5 でしたからかなり進んでいました。その日の内にすぐ左足の付け根からカテーテルを入れて透析を開始しました。それから月、水、金、の一週間に 3 回の透析療法が始まりました。まだ私は腕にシャントを造っていませんでしたので入院初日、透析後そのままシャントの手術をしました。

カテーテルは一回ずつ抜くのではなく、24 時間入れっぱなしですので 6 時間に一度カテーテルの洗浄とヘパリンの注入を行います。当然体を起こす事は禁止され、(現在ではカテーテルも進歩して動くことが出来ますが、当時は硬い物でした) シャントが出来上がるまで 3 週間、24 時間ベッド上安静を余儀なくされました。個室に入れられましたから 3 から 4 時間に一度看護師さんが来るだけで、後は本を読んだりテレビを見たりしていました。とにかく地元でないものですから誰もこない。勿論近隣に親戚はいましたけれど心配かけるのも気が引けましたので誰にも知らせませんでしたから当然と言えば当然です。日曜日に神奈川で生活している弟達二人が来るのが唯一の楽しみでした。

カテーテルを入れられていちばん堪えたのがとにかく動けない。ご飯を食べるときも頭をようやく上に上げられるくらいしか起こせないのでおかずが何であるか手に取るまで解らない。介護がつくわけでもなく何からなにまで一人でする事になる。トイレも困った。防衛医大の看護師さんはとにかく若すぎる。とても献身的なのは涙がでるほど嬉しいのだけれども、20 代前半のかたが大半を占めている。小のほうなら一人でできるけれど、大となると看護婦さんは他の病室のお年寄り患者さんと同じように何からなにまで世話をしようとする。これがとにかく恥ずかしいし、窓を自分では開けられないのでどうしても個室の中に香ばしい香りが漂う。なかなかナースコールが押せなくて悩んだものでした。

この間に弟達二人が主治医に申し出てドナー検査を受ける手続きを取っていました。二人とも気楽に私の所に来て私の病室で 3 人一緒に検査を受けました。私自身も別に量は半端じゃない(15 本くらい)にしても血液を取るだけだし、検査を受けたからと言って必ず移植を受けなくてはならない訳でもなかったのですんなりに考え込む事もなかったし。弟達も同じだったと後から聞きました。

検査結果が出るまでの間は別に移植について苦はなかったのですが、とにかく動けないのと暇で、とてもわがままな話ですが、そんなことで気が滅入りそうでした。そんな中、能代市内の友人からの激励の手紙や声のお便りなどをいただき、随分励まされました。人とこれだけコミュニケーションが取れないのがこんなに辛いものだとは思っても見ませんでした。

さて、それから2週間が過ぎ、ついにHLA検査結果がでて主治医が説明に来ました。HLAの型が、次男は70% 3男が100%一致したとの事。血液型は次男はO型 3男は私と同じB型との事で、3男に決定したいとの事を言われました。しかし、肝機能に少々不安があるので諮問委員会にかけないと最終的な決定はできないとの事でした。この時私はもうやめて下さいと主治医に申し出ました。

しかしながら、弟も気丈で、検査が怖かった。きっと前の日に酒を大量に飲んだからに違いないから再検査してくれ!とのこと。そこで再検査する事になりました。この結果が出るまでに4日間位の時間がありまして自分の中で様々な葛藤がありました。基本的にはやめてしまって透析を続けていこうという考えだったのですが、気を抜くと透析を一生続けていくとなると生活にも仕事にもかなりの支障をきたすに違いない。時折「もしかすれば自由になれる。透析をしている分にはその中で生きていけるのに、さらに上のものが見えたときそれを求めてしまう」こんな自分が本当に情けなかった。倫理的に考えると、自分のエゴで人を傷つける事は認められるものではない。しかし、今ここにレシピエントになろうとしている自分もいる。気が狂いそうになりました。

そして検査の結果がでて、移植が決まることになります。病院の説得が大きかった。HLAが100%、血液型が同じ。それは一卵性双生児と同じ状況。それが兄弟間で実現していると言うことは、大変興味深い研究材料であったのです。弟からも、病院側からも説得され、自分の中では大方は移植をするのだという気持ちに傾いてはいましたが、どうしても受け入れられないもう一人の自分をかかえたまま、腕のシャントができ、弟にも説得されるまま、一応は申し込んで秋田で透析をして移植をする10月6日まで待つ事になりました。

結論を出せないまま私はまた能代に戻り仕事をしながらミナトクリニックで透析をしていました。気持ちがまだ決まっていなかったので透析をしている間にも医師を捕まえて意見を聞いたりしていました。

その医師は「くれると言うのだったら気が変わらない内にもらってしまった方がよいぞ。欲しくたって家族からもらえない人もたくさんいたからな。」とっていました。

町内の人や会合にでたりしたときも様々な人に意見を伺いました。皆移植を受けべきだという意見だった。

そんなとき高校時代の恩師にお会いして、思いをぶつけたところ、こう言われました。「おまえの気持ちはよく解るが、腎臓の移植を受けたくても受けられない人はたくさんいる。みんな苦労している。今おまえははからずも移植を受けられる状況にある。それはきっと神様がおまえに課した運命だと思って受け入れなさい。体が自由になる。そうすれば動けるだろう。そうなったときにきっとおまえは何かしなければならぬことがあるに違いない。この世の中に不必要な人間なんて存在し

ない。それぞれが天命をもって生きているのだから、体調を戻して自分すべきことを見つけて精一杯生きてみたらどうか？何をすべきか見つけてみなさい。」と言われました。

「生かされている」という言葉が今も耳に残って離れません。

また、夏休みで帰省していたドナーとなる一番下の弟とゆっくり話す機会を持った。弟は「確かに手術なんかした事もないしものすごく怖い。でも兄貴が移植する事でまた昔みたいに元気に動けるようになるのならぜひ使って欲しい。何の気兼ねもいらないから」と言う。その時、小さい頃の話など色々している内に自分の中で良い悪いは別にして受け入れる事に決めること整理ができました。

様々な方々がすでに生体腎移植の準備で動いて下さっている以上今更掌を返したように止める事はできない。それは私も弟も十分に承知している。後で聞いたのですが、この頃、弟も、また父も同じような夢にうなされていたといいます。何かに追いかけられる、あるいは移植後に事故に遭い残された腎臓がつぶれてしまったというような夢を見たそうです。家族みんなに随分心配をかけました。

吹っ切れたはずなのに罪の意識が時折頭をもたげてくる。この頃しきりに考えていたのが今生きている自分よりも、つまり自分が生まれてきて、そして今に至るまでに犯してきた罪について。何代も前からの生まれ変わり死に変わり犯し続けて来た事に対する罪。仏教でいう「宿業」ではないのだろうか。そうだとすれば何と罪深い事か。自分だけならいざ知らず、兄弟までも巻き込んで今私が行おうとしている事は、まさに宿業を越えて更なる罪を犯しているのではないだろうか。

私は学者でもなければ宗教家でもありません。答は今のままでは出る訳もありません。今はただ弟の体の事だけを心配して手術当日を迎えるだけなのです。

そうしていよいよ手術の1週間前になり防衛医大に向かいました。自分自身の死の恐怖や手術への不安は全くありません。私の場合は失敗しても元の透析の生活に戻るだけです。私は毎日先生の顔を見ると弟の体の事をよろしく頼みます、といい続けるものですから、先生方も随分気を使って下さいました。

移植前夜

消灯時間が過ぎて真っ暗になった病棟面会室で弟と二人で、禁止されていた煙草を吸いながらとりとめもない話をしていました。弟はもう決まった事だからと涼しい顔をしていましたが、随分恐かったろうと思います。年が離れているせいもあって喧嘩なんかする事もなくよく面倒を見ていましたから、昔の話をしながら記憶が

走馬燈のように流れていく。1時間ほど話をして、明日も早いので、寝る事にして席を立ちます。その時一言弟が「兄貴、一生に1度だけの大サービスだからな。頑張れよ」と言って席をたちました。私は「有り難う」と言うのが精一杯でした。それぞれ部屋に帰って明日に備えましたが、涙が止まりませんでした。

移植当日

移植手術当日、朝から何かと準備でせわしない。5時に起こされて忌まわしい500CCの浣腸。その後茶色いイソジンのお風呂に入って消毒。スケジュールがびっしりと詰まっただけでもうあれこれ考えている余裕はない。もはやまな板の上の鯉状態です。この日は初めて両親も秋田からやってきていたが私は心配いらないからと言って弟の方についていてもらった。私は程なくして無菌室に移されたので外の様子は解りません。8時20分、時間がきました。弟が私の部屋の前で止まって、先に手術室に向かう弟に向かって「ありがとう、頑張れよ」と声をかけると「兄貴も頑張れよ」と言ってVサインを出していきました。自分の弟ながら大した精神力だと感心しました。

20分位して私も向かう時間となりました。手術室に入ると弟は右手に寝せられていて何やら点滴を幾つも打たれていました。手術台の上からこちらを見ている。この時私はいままで経験した事のない胸の痛みを覚えました。身体の底の方から湧き出てくるような痛みでした。私たちは目で言葉を交わし、私も左側の手術台の上に乗せられました。弟と目を合わせていたのはほんの10秒位だったのでしょうけれどもものすごく長く感じました。もう注射のせいで意識は薄らいできている。最後に執刀医に弟をよろしくお願いします。と言うのが精一杯でした。後は、「麻酔をします」と言われてすぐに意識はありませんでしたので何も解りません。

気がついたのはと言うよりも起こされたのはエレベーターの中でした。でもまだ麻酔が抜けきってなくてよく解らない。景色が断片的に目に入ってくるがなんだかさっぱり解らない。病室に着いて再び起こされたときには、主治医、執刀医の皆さんと、3人位の看護師さんがいました。開口一番私は「篤はどうですか」と聞きました。皆さん随分びっくりしていましたが「成功して今隣の部屋で寝ています」との事、ただ随分痛がっていますから麻酔を打ったそうです。それを聞いてもう居ても立ってもいられません。近くにいた主治医を捕まえて「とにかく痛みを沈めて下さいお願いします。」と、何度も何度も言ったと思います。結局自分の事は聞かずに寝てしまいました。1時間位して次に目覚めたとき、主治医から成功してお二人とも順調です安心して下さい、と言われました。意識がはっきりするにつれて私も下腹部が多少ではあるけれど痛い。しかしそれよりも隣の部屋から聞こえてくる弟の悲痛な叫び声。聞こえて来るのです。痛がっている様子が手に取るように解るの

です。「自分の為に取り返しのつかない事をしてしまった」ものすごい罪の意識が私を再び襲いました。悲しくて涙が止まりませんでした。手術成功の喜びなど全くありませんでした。

後から聞いて知ったのですが、移植を受ける方は痛みを殆ど感じませんが、切る範囲の広い提供者はとにかく痛い。それもそのはず、体の約半分を輪切り状態にされて腎臓を摘出するわけですから当たり前です。それを事前に言うと断られるケースがあるというので言わなかったらしい。事前に知らされなかった事に怒りを感じるとともに、自分に対する嫌悪感でいっぱいになりました。

手術を終えて

24時間体勢で看護師さんが私についています。気持ちは別として手術が終わってからはとにかく頭がはっきりしている。よく回るのです。まるで別人のようでした。尿は今までまったく出なかったのがものすごい勢いで出続けている。移植患者はみんなそうなのですが、出た分は必ず飲んで補給して腎臓に負担をかけないようにしなければならない。ただはじめの24時間は飲んではいけないものですから点滴で補うことになります。とにかく終わってしまったものはしょうがないのでとにかく今は弟の気持ちを無にしないためにも頑張るしかない。24時間が経過してからは自分でどんどん水を飲みましたからすぐに点滴もはずしてもらえました。ただ出る量が半端ではないので、1時間に200から500CCの水を飲まなければならない。これは流石に堪えました。夜も昼もありませんから寝ないで飲み続けることになります。隣で弟も痛みと戦っているのですから、自分も出来ることはやる！という義務感と、感謝の気持ちだけが支えでした。寝ないものですから看護師さんと一晩中話をしている。隣で声が聞こえるとちょっと見てきてくださるように頼み、植医療についてこれからの病院のあり方や、インフォームド・コンセントについて様々なお話をしました。

とにかくここでは説明が一方向的で患者の心の問題まで踏み込んだ医療は行っていないと感じました。全国から患者は集まってくるしとてもそこまで手が回らないのかもしれないが、そう言った面でのコーディネーターは必要である事。私は終わってみて心の問題をどのように解決していくのが最大の課題だと思いました。

手術後2週間の間無菌室でテレビもラジオも消毒できないと言う事で持ち込みできず、本も駄目。頭も体も腎不全の時と比べると全く違ってすっきりしている。目も視力が一気に快復して両目とも、1.5でした。慢性の疲れ目だったようです。そんな中で気力は充実していたのでこれからの事をじっくり考える事ができました。とにかく頂いた腎臓を一日でも長くもたせる事。これから自分はどのようにして恩

返しをすべきか。幸いにも弟は1週間で歩けるようになり、10日目で退院しました。弟に対してはとにかく長く生きる事が最大の恩返しになる。腎臓を移植したからといって一生安泰というわけではありません。同じ病院で移植を受けた人でも3年目、4年目でまた透析に戻った人は何人もいました。強い免疫抑制剤の為腎臓もそうだが、腎臓以外の肝臓や他の臓器に支障をきたして、大変なことになっている人もたくさんあります。だから私は今この一瞬に力のすべてを使い悔いが残らない時間を過ごそうと心がけています。その一環として披露宴や人の集まる場所に行っては女装をして歌ったり、踊ったり、とにかく人の笑顔が見たくて色々なことをしています。

臓器移植の賛否を考えると、やはり当事者同士の気持ちを優先させるのが一番大事なことであると思います。自分の場合ははっきりとした意思表示ができない内にどんどん話が先行して気がついてみたら終わっていた感があります。でも私の知り合いでも移植を受けたいと思っている透析患者はたくさんいますし、また提供したいと考えている人もかなりいました。本人達がそれを望むのであれば赤の他人が口をはさむべき問題ではないと考えます。それを否定する権利は誰にもないはずです。この高度な医療は諸刃の剣でしょう。それを使う人間がしっかりと倫理感を持って携わらなければとても危険な道を歩む事になります。臓器売買や無理矢理脳死状態を作り上げるような輩が医療に携わるようでは先はないでしょう。また素晴らしい医師がいたとしてもチーム医療である移植はその体勢を確立しない内は進んでいかないでしょう。また医療の立場からだけではなく、日本人の無宗教と言われるの中にも根づいている生死観も大事な問題だと思えます。むしろここが一番の問題でしょう。。50回忌まで自分の家族を守ってこの世に滞在するといった考え方を生活している人々を、また死を迎えてもその時限りでお別れをするといった欧米的な考え方ではなくむしろその後の供養を重んじ墓参するといった国民性はやはり特殊で、脳死を認めて自分の臓器を提供する事は、かえって本人はよくても今度は家族が認めないと思われれます。しかしながら私はレシピエントとして一日も早く脳死を認め、またしっかりと医療体勢を確立し、インフォームド・コンセントのしっかりしたものを作り上げて移植医療をすすめて欲しいものだと思います。

以上は移植2年目の感想でした。やっとならここまで書けるように整理ができました。

※脳死が人の死として認めるべきか、まだ論議されている頃記したものです。

97年の10月で5年目を迎える私としては多少考え方が変わってきています。生体腎移植については生きている人間の合意の元で成り立っていますからそんなに問題もないのですが、脳死の段階で人の死と断定して本当にその人がこの世の中で

人生を全うしたと言えるのでしょうか。つい先日も二ツ井町の消防救急隊の方とお話する機会を持ちましてそのお話の中で「先日、心臓停止している方を運んだのですが発見も早く一人の若い隊員が心臓マッサージをしながら病院まで運んだのだそうです。その患者さんは病院に着く頃には心臓も動き出していましたが、意識は在りませんでした。次の日にその隊員さんはその方がどうなったか心配で病院へ友人と一緒にいって見たそうです。その時にはすでに運んだ患者さんは意識も回復し元気だったそうです。ところがその患者さんはその若い隊員を見たとき、指さして「私はこの人に助けられました。」といったそうです。」なぜ無意識の中での事なのに個人をさしてそのような事が言えるのでしょうか。科学では証明できない事が人間にはまだまだ有るのでは無いかと思えてなりません。脳死ではなく心停止でしたから死の判定としては脳死と比較対照出来るものでは有りませんが、どこで人の死とするのかも一度改めて考え直す必要は有ると思います。人が死の判定を受けてから意識はいったいどのような経路をたどるのかそれはきっと永遠の謎です。もし脳死の段階であってもまだ潜在的にその人個人が体の内部に残っていたのならそれを断ち切る権利は誰にもないのではないのでしょうか。

しかしながら私が病院で全国各地の様々な方と意見交換をしている中で、現実的には介護をしている方の苦悩、もはや回復の見込みのない人間を最先端の医療機器を使って生かしている現実、それを目の当たりにすると自分自身では答が出せません。一つだけ言えるのは、もし自分がそのような立場に立ったのなら無駄な延命措置はとらないで欲しいという事です。残された家族のためにも。自分の事ならこのようにはっきりしていますが、他の方まで同意させる自信は全くありません。個人の主観の問題ですから。これはこれから一人一人が考えていかなければならない大きな課題だと思います。私自信ももう少し踏み込んで考えていきたいテーマだと思っております。

私自身は移植が終わって一言だけ添えておきたいのは、生体ドナーは哀れみではなく「布施」の気持ちを持たなければ良い形で進まないと思います。レシピエントとなったら、もう一人だけで生きているのではないと言う事を肝に命じて、自分を大事に、又出来る限り生きとし生けるものに慈愛の心を持って暮らしていけたら素晴らしいと思います。また皆さんがそんな気持ちをもてたらどんなに素晴らしいでしょう。そうなる事を念じまして終わりたいと思います。

某所での講演記録より MURAKOSHI